

日本や日本人に問われる 世界で生きる覚悟

柳井正

株式会社ファーストリテイリング
代表取締役会長兼CEO



日本を完全な敗戦状態とみる「ユニクロ」の柳井正会長は、日本は一から出直しをする覚悟を固めないと、この国の未来は全く見えないと警告する。日本は現在と将来の2つの超大国の隣国という立地にある。それを生かすためにも日本や日本人は世界で生きる覚悟を固め、本物の資本主義として生き残るしか道がないと語り、その立場からアジアとアメリカも含めた自由貿易圏構想を提案する。

日本は戦後、物質的には非常に豊かになったのですが、精神的には貧しくなったように思えます。何かでき上がってしまった、日本や自分の企業、あるいは自分自身がたいしたものだと勘違いしているのではないかと。少し言いすぎかもしれませんが、先進国面をして、タニマチ的感觉で金だけ出して何もしないという、最悪な状況なのではないかとさえ感じます。リスクを全く負わないので、毒にも薬にもならない。そういった日本では駄目なのではないでしょうか。私は、国も国民も企業も、もう一度ゼロから出直しをする覚悟をしないと変わらないのではないかと思います。

今の日本の状況はもう最終段階まで来ていて、完全に敗戦なのではないかと私は思っています。どういう敗戦かと言うと、経済的であり社会的な敗戦です。全てが過保護で経済的原則に沿っていない。日本が前提としていた状況はすでに完全に崩れたのに、いまだにそれにすがっている。今、日本は戦後最大の不況とされています

が、これは循環的なものではなくて構造的な不況、つまり昔の英国病のような日本病なのではないかと思います。経済は多分、先進国では最低の水準に近いと思います。失業率は他の先進国より低いところもありますが、実質的には非常に高いのではないかと思います。日本の常識は、世界的基準では非常識になっている。特にもたれ合いや談合体質、年功序列、横並び、悪平等主義、形式主義、集団主義といったものは否定されるべきではないでしょうか。

こういった日本の現状を人に例えれば、恐らく40年間こつこつとサラリーマンをやって小金を貯めた、小心で無防備な年若いサラリーマンで、歳で言うと定年前後ぐらい。奥さんはやはり専業主婦で、ボランティアやカルチャー教室、環境やグルメといったものに興味があるかもしれない。そして子どもは30歳ぐらいでフリーターをやっているのではないかと思います。こんな小市民的な環境では、良い発想や未来に対する希望は感じられません。唯一持って

いるのが、少しの個人資産。ただしその個人資産を、日本の中だけで閉じた非効率な行政や村社会的、日本的なメンタリティーが全て使い果たしている。これがこの国の現状ではないかと思えます。

経済開国でしか 強い経済体質はつukれない

日本と北朝鮮はよく、最後の社会主義国だと言われます。私はその通りだと思えます。日本は金をかけ過ぎて効率が低い反面、今までの蓄積で個人資産は世界最高水準という、大きな矛盾を抱えた国です。そんな日本ですが、優位点もあります。それはアジア、世界の成長センターに位置することです。また、日本は世界第2の消費市場です。単一民族で均一な市場で、これだけ大きな市場というのは、恐らく世界で最大ではないでしょうか。また、超大国の米国と、未来の超大国中国との間に日本があることは素晴らしいことですし、産業や社会のインフラは、全て世界最高水準に達しているのではないかと思います。これほど良い環境なのですが、ほとんどの企業が儲かっていないというのも、また日本の不思議です。日本だけで閉じている産業というのは、やはり全部駄目です。その最たるものが農業ですし、あるいは建設、流通、金融です。このような保護主義や、日本国内だけで閉じている産業は、苦しくて外風の風に当てて強い体質にしないといけない。

また、日本そのものも不景気産業かも知れません。このまま日本が閉じたままでは

ると、ますます駄目になってしまいます。戦後のフワフワした、中産階級の箱庭文化的なものは否定すべきです。日本も日本人も、全産業が日本国内では完結しないと思わなければなりません。

私は商売人ですので、ビジネスに国境はないと考えています。太平洋を自由貿易圏にして欲しいし、アメリカや中国の隣国であることは非常に幸福だと思います。ですから、世界で生きる覚悟をしたほうがいいのではないかと思います。そういった国でないと生き残れません。よくうちの社員に言うのですが、今まではまあまあの仕事で年収1000万円だったのが、今後、年収は100万円と1億円に二極化するのではないかと思います。付加価値を出す人は1億円もらえますし、単純労働しかしない人は100万円に集約されていく。こういった環境は、企業も産業も国も一緒です。つぶれかけた生活保護所帯で生き残っても無意味です。

そこでもうひとつの私の提言は、日本には国境がない、ビジネスには国境がないと考えるべきだ、ということです。日本はシンガポールや香港のように生きるべきですし、日本人や日本企業は、華僑やユダヤ人のように生きるべきです。華僑やユダヤ人と言うと、それだけでアレルギーを起こされる方が多いのですが、それは誤解です。現実の資本主義の世界で生きていくたくましさや、約束は必ず守るということ、個人としても企業としても個を確立する自立心といったことは、日本人も見習うべきで、そのように生きるのが正解だと考えます。

なぜそう考えるかと言うと、われわれに

とって華僑の取引先は非常に多いのです。例えばわれわれが取引しているある香港の企業は、年間5000万点くらいセーターを作っています。その工場が世界中、例えばモリシャスやインド、タイ、インドネシア、ベトナム、ミャンマー、カンボジアやグアムなどにあります。しかもその会社は、アメリカやヨーロッパに上場会社を所有している。また、われわれはヨーロッパでも事業を行っているのですが、ここで繊維や小売りを牛耳っているのはユダヤ人です。彼らはロシア革命や第二次世界大戦の終戦で、ヨーロッパの先進都市へ無一文で逃げて帰った。そして、今やヨーロッパだけでなく、中国の上海や東欧にどんどん投資している。そういったことを日本もやるべきではないでしょうか。

世界最高の市場を形成し 本当の資本主義として生き残れ

さらに、日本は外国企業や外国人が日本の企業の半分ぐらいを占めても構わないというように、考え方を変えなければならないと思います。「日本にある企業は、日本の企業でなければ」というメンタリティーは捨てるべきです。今まではほとんど外国企業のことを考えずに、日本で物を作って外国に売りさばくことばかり考えてきました。もし日本が経済大国ならば、その責任を果たすべきです。それは率先してやるべきで、それ以外に日本が生き残る道はないでしょう。

今まで日本は、みんなが損をすることば

かりにお金を使って喜んでいたり、既得権益のためだけに税金を使っていた、非常に不合理な社会です。これは、やはり変えなければいけない。日本は自由競争をして、世界で最高の市場を作って、本当の資本主義国家として生き残らなければいけません。残されている時間は、非常に少ないのではないかと思います。

市場開放と言うと、よく「産業構造は変わらないといけないうのですけれど」、と「けれど」が付きます。そして、「変えるスピードも考えなければいけない」と言います。しかし、これは好き嫌いなどの問題ではなく、個人としても企業としても国としても、生き残っていくための資本主義の原則ではないでしょうか。自分たちが変化しない限り、生き残れないのが現実であって、主義主張ではないということを理解しなければなりません。

最後に、できれば日本は自由貿易地域のようなものを作るべきだと思います。アメリカとヨーロッパは、それぞれ自らの地域ブロックを持っています。多分アメリカは一国巨大主義で反対するでしょうが、日本も、アメリカ、中国、韓国、東南アジアとともに自由貿易地帯を作るべきだし、これが世界の成長エリアになるのではないかと。そういったことを私は考えています。